

超美人な未亡人と溺れるようなセックスをする話

サークル名..裏森

作者 ..うらもり

プロローグ .. 高嶺の花、喪服の隣人

第一章 .. 金曜日の甘い罨

第二章 .. 夜の帳、理性の決壊（前編）

第二章 .. 夜の帳、理性の決壊（前編）

第三章 .. 寝室、むき出しの渴望

第四章 .. 泡と肉の檻、浴室の密事（前編）

第四章 .. 泡と肉の檻、浴室の密事（後編）

第五章 .. 堕ちていく幸福、果てなき獣たちの夜（前編）

第五章 .. 堕ちていく幸福、果てなき獣たちの夜（中編）

第五章 .. 堕ちていく幸福、果てなき獣たちの夜（後編）

エピローグ .. 蜜月の朝、終わらない泥沼

【登場人物】

佐久間俊樹（さくま としき） .. 身長 170

体重 64

石嶺玲奈（いしみね れいな） .. 身長 163

体重 48

【プロローグ】 高嶺の花、喪服の隣人

三月のまだ肌寒い風が、真新しいマンションの廊下を吹き抜けていく。

佐久間俊樹は、山積みになった段ボール箱の山を見下ろしながら、小さく溜息をついた。
三十五歳。独身。

世間一般で言えば、働き盛りであり、家庭を持ってもおかしくない年齢だ。だが、俊樹の人生には、そういった華やかな彩りは一切ない。

学生時代から目立つ存在ではなく、社会人になってもそれは変わらなかった。仕事は真面目にこなすが、出世欲もなければ、職場の同僚と飲み歩くような友人もない。休日は一人で映画を見るか、本を読むだけ。金を使う相手もないため、預金残高だけは年齢平均を大きく上回っている。

今回の転勤もそうだ。

『急で悪いが』と上司に言われた時も、俊樹は表情一つ変えずに頷いた。断る理由も、この土地に留まる理由も、彼には何一つなかったからだ。

「……まあ、住処だけは立派になったか」

独り言が、家具の少ない広いリビングに虚しく響く。

引越してきたこのマンションは、最寄り駅から徒歩十分、セキュリティ完備の分譲賃貸だ。六階の角部屋。一人で住むには広すぎる2LDKだが、金の使い道がない俊樹にとっては、少し贅沢な寝床を確保したに過ぎない。結婚など、とうの昔に諦めている。

このまま誰とも深く関わらず、淡々と年を取り、静かに死んでいくのだろう。自分の人生など、所詮そんなものだ。

そう自分に言い聞かせ、俊樹は引越しの片付けを機械的に進めた。午後四時を回り、陽が傾き始めた頃、ようやく荷解きが一段落した。

ふと、常識的な義務感が頭をよぎる。

（挨拶だけは、しておかないとな……）

隣近所との付き合いなど煩わしいだけだが、大人のマナーとして、顔くらいは合わせておくべきだろう。

俊樹は用意しておいた菓子折りの紙袋を手にとると、重い腰を上げた。

玄関を出て、すぐ隣の部屋――六〇二号室の前へと立つ。

深く息を吸い込み、インターホンを押した。

ピンポン、と乾いた電子音が響く。

しばらく反応がない。「留守か？」と思いかけたその時、インターホンのスピーカーから、思いのほか澄んだ、鈴を転がすような女性の声が聞こえた。

『……はい』

「あ、突然すみません。今日、隣の六〇一号室に越してきた佐久間という者ですが。ご挨拶に伺いました」

『あ、お隣の……。いま開けますね』

ガチャリ、と金属的な音がして、重厚なドアがゆつくりと開く。

俊樹は社交辞令の笑顔を作り、頭を下げる準備をした。

だが。

ドアの隙間から現れた人物を見た瞬間、俊樹の思考は完全に停止した。

「初めまして。お隣の石嶺です」

そこに立っていたのは、この世のものとは思えないほどの美女だった。

濡れたような艶のある黒髪を後ろで束ね、喪服を思わせるような地味な黒のワンピースを身に纏っている。

年齢は自分と同じくらいだろうか。だが、その肌は陶器のように白く透き通り、整いすぎた顔立ちには、どこか近寄

りがたいほどの気品を漂わせていた。

何より俊樹の目を釘付けにしたのは、そのあまりにもアンバランスな肉体だ。

慎ましい服の上からでもはつきりと分かる、暴力的なまでのふくらみ。地味なワンピースの生地が、胸元だけ悲鳴を上げるようにパンパンに張り詰めている。Gカップ、いや、それ以上かもしれない。

ただ大きいだけでなく、たつぷりと水を含んだような重量感のある巨大な果実が、重力に従ってたわわに実っている。その圧倒的な質量のせいで、腰のくびれが強調され、えも言われぬ扇情的な身体のラインを作り出していた。

彼女が呼吸をするたび、その豊かな胸がゆつくりと持ち上がり、吐く息と共にたわんと揺れる。その微かな動きだけで、周囲の空気が甘く湿っていくような錯覚を覚えた。

（なんだ、この人は……）

スーパーで買い物をしている主婦とも、会社の事務員とも違う。

まるで、モノクロの映画から抜け出してきたような、湿り気を帯びた美しさ。

ふわりと、鼻先を線香の甘い香りが掠めた気がした。

「……あの、佐久間さん？」

不思議そうに小首を傾げる彼女の仕草に、俊樹はハッと我に返った。

見惚れていた。いや、呆けていたと言ってもいい。

三十五年間、女つ気のない生活を送ってきた俊樹の錆びついた心臓が、ドクン、と嫌な音を立てて跳ねた。

「あ、いや、すみません！ 佐久間です。これからお世話になります。これ、つまらないものですが……」

慌てて差し出した菓子折りを、彼女——石嶺玲奈は、白い両手で丁寧に受け取る。

「まあ、ご丁寧にありがとうございます。石嶺です。こちらこそ、よろしくお願いいたします」

彼女が深々とお辞儀をする。

その瞬間、重力に従ってたつぷりと垂れ下がった胸の谷間が、服の襟元から覗きそうになり、俊樹は慌てて視線を逸らした。

見てはいけないものを見てしまったような背徳感。

だが、網膜に焼き付いたその白さと柔らかそうな量感は、脳裏から消えてはくれなかった。
「では、失礼します」

逃げるように背を向け、自室に戻る。

ドアを閉め、鍵をかけると、俊樹はその場にへたり込むように背中を預けた。

心臓の鼓動がまだ早い。

ただの隣人への挨拶だ。それだけのことなのに、掌にはじつとりと脂汗が滲んでいた。

（隣に、あんな美人が住んでいるのか……）

諦めきっていたはずの俊樹の日常に、一滴の黒いインクが落ちた。

それが、これから始まる泥沼への入り口だとは、この時の俊樹はまだ知る由もなかった。

【第一章】 金曜日の甘い罠

引越してから一ヶ月が過ぎ、佐久間俊樹の新生活は、淡々とした日常のレールに乗っていた。

朝七時に目覚まし時計を止め、重い体を起こしてスーツに着替える。満員電車の湿った空気に耐えて出社し、誰に感謝されるわけでもない数字の処理をして、終電一本前の電車で帰宅する。その繰り返しだ。

東京の夜景は煌びやかだが、三十五歳の独身男にとっては、ただの色のない光の集合体でしかなかった。ただ一つ、以前と違うことがあるとすれば、それは隣人の存在だった。

六〇二号室の住人、石嶺玲奈。

朝のゴミ出しや、休日のマンションの廊下で、何度か顔を合わせることがあった。

「おはようございます」

「行つてらっしゃいませ」

交わす言葉はまだ挨拶程度だ。だが、その鈴を転がすような澄んだ声を聞き、彼女の柔らかな微笑みを見るだけで、俊樹の無彩色の日常が少しだけ色づくような気がしていた。

彼女の出すゴミ袋が、いつも指定の小サイズ一袋だけであることも、俊樹は密かに知っていた。男の靴や、ビールの空き缶が見えたことは一度もない。

そんな些細な情報だけで、俊樹の乾いた心は少しだけ潤うのだった。

そんなある金曜日の夜のことだ。

一週間の激務を終え、疲労困憊で最寄り駅を降りた俊樹は、駅前のスーパーから出てきた一人の女性の後ろ姿に目を奪われた。

街灯に照らされた艶やかな黒髪。間違いなく、玲奈だった。

今日の彼女は、いつもの喪服のような黒いワンピースではない。

体に吸い付くようなベージュの薄手のニットに、足首まで隠れるロングスカートという装いだ。洗練された大人の私服だが、そのニットの上からでも、豊かな胸の隆起は隠しようもなく主張している。

両手に大きなレジ袋を提げているせいで、肩が前に入り、その分だけ胸が強調されていた。歩くたびに、巨大な果実がたわん、たわんと重たげに揺れ、ニットの生地が悲鳴を上げるように引き絞られている。

その光景だけで、俊樹の股間が熱くなりかけた。

「あ、石嶺さん」

鼓動を抑えながら声をかけると、彼女は驚いたように振り返り、そしてパッと花が咲くような笑顔を見せた。

「あら、佐久間さん。こんばんは。お仕事帰りですか？」

「ええ、まあ。石嶺さんはお買い物ですか？ ずいぶん荷物が重そうですね」

彼女の手には、Lサイズのレジ袋が二つ。キャベツや牛乳、大根といった重い食材がぎっしりと詰まっていて、白魚のような細い指にビニールの持ち手が赤く食い込んでいる。

「ふふ、週末なのでつい買いだめしちゃって。平気ですよ、これくらい。私、意外と力持ちなので」

そう強がつて袋を持ち直そうとした瞬間、バランスを崩して体がよろめいた。

「あっ」

小さな悲鳴と共に、袋の中の大根が飛び出しそうになる。俊樹は反射的に手を伸ばし、彼女の手ごと袋の持ち手を支えた。

柔らかく、少し冷たい指先の感触。

そして、ふわりと漂ってきたのは、シャンプーと女性自身の体臭が混じり合った、甘く切ない匂いだった。

「だ、大丈夫ですか？」

「す、すみません……！」

「僕が持ちます。どうせ帰り道は同じですし」

「いえ、そんな、悪いですから……」

「いいんです。男の手が空いてるのに、女性にそんな重い物を持たせるわけにはいきませんから」
俊樹が半ば強引に二つの袋を奪い取ると、玲奈は頬を朱に染め、申し訳なさそうに頭を下げた。

「……すみません。お言葉に甘えます。ありがとうございます」

二人は並んで夜道を歩き始めた。

これまで挨拶しかなかった二人の距離が、物理的にも心理的にも近づいた瞬間だった。

カツ、カツ、と二人の足音だけが夜の住宅街に響く。

隣を歩く彼女の気配を、全身の毛穴で感じていた。風が吹くたびに、彼女のスカートの裾が俊樹のスーツのズボンに触れる。そのたびに、俊樹の心臓は早鐘を打った。

視界の端には、どうしても彼女の豊かな胸の揺れが映り込んでしまう。荷物を持たなくなったことで解放された胸は、より一層自由に、その圧倒的な質量を揺らしていた。

マンションに到着し、エレベーターで六階へと上がる。

密室のような箱の中で、二人の呼吸音が重なる。

六〇二号室の前で荷物を渡すと、玲奈は鍵を開けながら、ふと思いついたように俊樹を見た。少しの躊躇い、そして意を決したような瞳だった。

「あの、佐久間さん。もしよかったら……夕ご飯、食べていきませんか？」

「え？」

予想外の提案に、俊樹は素っ頓狂な声を上げた。

「荷物を持っていただいたお礼です。それに……作りすぎちゃいそうだったし、一人で食べるのも寂しいので……ダメ、でしょうか」

上目遣いに見つめられ、俊樹の思考が停止する。

隣人の人妻の部屋に上がり込むなど、常識で考えればNGだ。旦那がいるはずだし、こんな時間に男を招き入れる

など、変な誤解を招く恐れもある。

断るべきだ。大人の理性はそう警告している。

だが、玲奈の潤んだ瞳に見つめられると、拒絶の言葉は喉の奥で溶けてしまった。

彼女の「寂しい」という言葉が、俊樹の孤独な心に深く刺さったのだ。

「……ご迷惑でなければ、お言葉に甘えます」

「本当ですか？ よかった。どうぞ、散らかつてますけど」

通された部屋は、俊樹の殺風景な部屋と同じ間取りとは思えないほど、暖かな空気に満ちていた。

六〇一号室の冷たい空気とは違う。玄関には可愛らしい花が飾られ、スリッパが丁寧に揃えられている。そして何より、どこか女性特有の甘い生活臭と、出汁のいい香りが漂っていた。

これが、家庭の匂いか。俊樹は眩暈にも似た感覚を覚えながら、ダイニングの椅子に腰を下ろした。

玲奈はすぐにキッチンへ立ち、エプロンをつけた。

背中で紐を結ぶその仕草だけでも、俊樹にとっては刺激が強すぎた。ニットの上からエプロンの紐が食い込み、腰のくびれと尻の丸みが露骨に強調される。

トントントン、と包丁の音が響き、鍋から湯気が上がる。

夢のような時間だった。

やがて運ばれてきたのは、肉じゃがに焼き魚、ほうれん草の胡麻和え、そして具沢山の味噌汁という、手料理の王道だった。

一口食べた瞬間、出汁の優しい風味が口いっぱいに広がり、俊樹は思わずほう、と溜息を漏らした。

コンビニ弁当や外食の濃い味付けに麻痺させられた舌と胃袋が、本当の「食事」を思い出して歓喜している。

「……すごく、美味しいです。こんなに美味しい肉じゃが、初めて食べました」

「ふふ、お世辞が上手ですね。ただの家庭料理ですよ」

向かいに座り、嬉しそうに微笑む玲奈。

彼女は自分ではあまり食わず、俊樹が食べる様子を母のような、あるいは妻のような慈愛に満ちた目で見守っていた。

こんな美人が家で待っていて、こんな美味しい飯を作ってくれる。

彼女の夫は、前世でどれだけの徳を積んだというのだろう。羨望と、ドロリとした嫉妬が胸の奥で渦を巻く。ふと、時計を見ると夜の八時半を回っていた。

玄関には男物の靴がなかった。洗面所にも髭剃りは見当たらなかった。

確信めいた予感と、聞いてはいけないという理性がせめぎ合う。

だが、俊樹は聞かずにはいらなかった。

「あの、旦那さんは帰りが遅いんですか？ 僕なんかがこんな時間にお邪魔していて、怒られないでしょうか」
恐る恐る尋ねると、玲奈の手がピタリと止まった。

部屋の空気が、一瞬にして冷えたように感じた。換気扇の回る音だけが、やけに大きく聞こえる。

彼女は視線を伏せ、寂しげな、それでいてどこか諦めたような笑みを口元に浮かべた。

「……主人は、もう帰ってきません」

「え？」

「三年前に、病気で亡くなったんです。……だから今は、私一人なんです」

俊樹は言葉を失った。

箸を持った手が空中で固まる。

頭を下げ、小さくなった彼女の肩を見て、俊樹は自分の配慮のなさを恥じた。辛い傷口を、土足で踏み荒らしてしまった。

謝らなければならない。そう思った。

だが。

真っ先に湧き上がった感情は、同情や後悔だけではなかった。

（一人……なのか？）

ドクン、と心臓が大きく、重く跳ねた。

それは、紛れもない「歓喜」だった。

目の前にいるこの極上の美女は、誰のものでもない。夜に帰ってくる男はいないのだ。今、この部屋には男は自分しかない。

不謹慎すぎる思考に、俊樹は慌てて己を戒めた。人が亡くなっているんだぞ。何を考えているんだ俺は。

「あ、すみません……変なことを聞いてしまつて。本当に、申し訳ありません」

「いいえ、いいんです。もう落ち着きましたから。……でも、ふとした時に、やつぱり寂しくなっちゃつて」

玲奈の言葉が、湿り気を帯びて俊樹の鼓膜に張り付く。

気まずい沈黙が流れる中、食事を終えた。

真実を知ってしまった以上、長居するのは危険だ。自分の中の黒い感情が、さらに膨れ上がってしまう気がした。

「ご馳走様でした。本当に美味しかったです。……遅くなるとあれですし、そろそろ、失礼しますね」

俊樹が立ち上がるとした、その時だ。

「……待つてください」

玲奈の声が、切羽詰まつたように響いた。

振り返ると、彼女は縋るような、潤んだ瞳で俊樹を見上げていた。

「あの、もう少しだけ……いてくれませんか？」

「え……？」

「久しぶりなんです。こうして誰かとゆっくりご飯を食べたり、お話ししたりしたの。……もう少しだけ、お話ししたいなつて。……迷惑、ですか？」

上目遣いに見つめられ、袖口を掴まんばかりの勢いで引き止められる。

壁掛け時計の針は、もうすぐ九時を指そうとしている。

決して早い時間ではない。だが、明日は土曜日だ。仕事はない。

何より、「迷惑ですか？」と不安げに揺れるその瞳を前にして、「帰ります」と言えるほど、俊樹は強くなかった。

ここで突き放して、彼女に「嫌われている」と思われたくない。いや、本音を言えば、帰りたくなどなかった。未亡人だと知った直後の、この二人きりの密室。

空気は既に、濃厚な色を帯び始めている。

危険だと分かっているながら、俊樹の喉はぐくりと鳴った。

「……いえ、迷惑なんてとんでもないです。明日も休みですし、僕でよければ」

俊樹が頷くと、玲奈は安堵したように、パアツと表情を明るくした。

その笑顔は、どこか少女のように無防備で、そして残酷なほどに魅力的だった。

「よかった……！　じゃあ、コーヒー淹れますね。美味しいお豆があるんです」

弾むような足取りでキッチンへと向かう玲奈。

その後ろ姿を目で追いながら、俊樹の心臓は痛いほどに脈打っていた。

エプロンの紐が食い込む細い腰。その下に広がる柔らかな臀部のライン。

今夜は、簡単には帰れそうにない。そんな予感が、俊樹の脳裏を支配し始めていた。

【第二章】 夜の帳、理性の決壊（前編）

コポコポ、とコーヒーマーカーが湯気を吐き出す音が、静まり返ったLDKに響く。

俊樹はダイニングテーブルの椅子に座ったまま、キッチンに立つ玲奈の背中をぼんやりと見つめていた。換気扇の回る音と、時計の秒針が進む音。

生活音のほずなのに、なぜか今の俊樹には、それが時限爆弾のカウントダウンのように聞こえてならなかった。

ベージュのニット越しに見える、華奢な肩のライン。エプロンの紐が食い込むくびれ。そして、その下に広がる女性らしい丸みを帯びた臀部。

彼女がカップを取ろうと背伸びをするたび、スカートの生地が引つ張られ、太腿の輪郭が浮き上がる。

俊樹は慌てて視線を逸らし、手元の冷めかけたお茶を煽った。

喉が渴いて仕方がない。

「お待たせしました。熱いので気をつけてくださいね」

やがて、玲奈がお盆に二つのカップを乗せて戻ってきた。

ふわりと、深煎りのコーヒーの香ばしさと、彼女自身の甘い匂いが混じり合って鼻孔をくすぐる。

彼女はテーブルにカップを置こうとして、ふと手を止めた。

「佐久間さん。……せっかくだから、あちらへ行きませんか？」

彼女が視線で示したのは、リビングの窓際に置かれた、L字型の革張りソファだった。

黒いレザーが鈍い光沢を放っている。一人暮らしの俊樹の部屋にはない、いかにも高級そうな家具だ。

「え、でも……初めてお邪魔したのに、そこまで寛ぐわけには」

「ふふ、そんなに畏まらないでください。その椅子だと、お話しするのに距離が遠いですし。……ね？」

小首を傾げて微笑まれると、俊樹に拒否権など残されていなかった。言われるがままに席を立ち、ソファへと移動する。

腰を下ろすと、身体が沈み込むような柔らかな感触に包まれた。上質な革の匂いがする。まるで、逃げ場のない沼に足を踏み入れたような気分だった。

玲奈はローテーブルにコーヒーを置くと、当然のように、そのL字ソファのもう一方の辺——俊樹から見て斜め向かいの位置に腰を下ろした。

その距離、わずか五十センチほど。

手を伸ばせば触れられる距離に、Gカップの未亡人がいる。

その事実だけで、俊樹の掌にはじつとりと脂汗が滲んだ。

「佐久間さんは、どちらから引越していらしたんですか？」

玲奈がコーヒーを一口飲み、カップの縁から上目遣いに俊樹を見た。

まずは当たり障りのない会話から。それが逆に、今の異常な状況を際立たせている気がした。

「えっと、埼玉の方です。転勤族なもので、あちこちを転々としてまして」

「まあ、大変。じゃあ、こちらにはお知り合いも？」

「全くいません。会社と家の往復だけで……本当に、面白みのない生活なんです」

「ふふ、真面目な方なんですね。……でも、そういう実直な方、好きですよ」

ドキリとした。

社交辞令だと分かっている。だが、その声のトーンは、廊下ですれ違っていた時よりも確実に甘く、そして湿度を帯びていた。

会話は途切れ途切れに続いた。

この辺りのスーパースタットの、駅前の美味しいパン屋のこと、最近の天気のこと。他愛のない話題の隙間に、ふと沈黙が落ちる瞬間がある。

そのたびに、俊樹は目のやり場に困った。

玲奈がカップを口に運ぶたび、豊かな胸が腕に押されて形を変える。吐息と共に、たわわな果実が上下に揺れる。彼女もまた、時折熱っぽい瞳で俊樹の手元や口元を見つめているような気がした。

時計の針が九時半を回った頃、玲奈の質問は少しずつ、その核心へと近づいていった。

「……佐久間さんは、お一人なんですか？」

「え？」

「その……お付き合いされている方とか、いらつしやらないのかなって」

唐突な問いに、俊樹はカップを持つ手を止めた。

彼女の瞳を見る。そこには、単なる好奇心以上の、何か探るような光が宿っていた。嘘をつく必要などない。いや、ここで嘘をついてはいけない気がした。

「……いませんよ。もう何年も」

「あら、意外。佐久間さん、優しそうなのに。……モテそうなのに」

「まさか。仕事ばかりで、女性との縁なんて全くなくて。……もう、諦めているんです」

「諦めている……？」

「ええ。この歳ですし、このまま一人で生きていくんだろうなって」

自嘲気味に笑うと、玲奈は悲しげに眉を寄せた。

そして、カップをテーブルに置くと、トン、と一つ分だけ俊樹の方へ詰め寄った。

ソファが軋む音が、やけに大きく響く。

「……私も、です」

消え入りそうな声だった。

「主人が亡くなってから、私の中の時計は止まったままでした。誰かを好きになることも、誰かに触れられることも、もう二度とないんだろうなって……そう思って生きてきました」

彼女の独白。

それは、俊樹への共感であり、同時に「私は今、一人なのだ」という強烈なアピールでもあった。部屋の空気が、一気に変質する。

穏やかな食後のコーヒータ임が、濃密な男女の密会へと塗り替えられていく。

「でも……」

玲奈が顔を上げた。

潤んだ瞳が、まっすぐに俊樹を射抜く。

「佐久間さんが引越してきてから……少しだけ、時計が動き出した気がするんです」

「玲奈、さん……」

心臓が早鐘を打つ。

喉が渴いて言葉が出てこない。

彼女はさらに身を乗り出した。膝と膝が触れ合う。

彼女の体温が、薄い布越しに伝わってくる。シャンプーの甘い香りが、俊樹の理性を麻痺させていく。

「そういえば、佐久間さんっておいくんなんですか？」

吐息がかかるほどの距離で、彼女が囁く。

「……今年で、三十五になります」

「まあ……。私、三十六なんです。一つ違いですね」

「えっ、そうなんですか？ もつとお若いと思っていました」

「やだ、お上手なんだから。……でも、同世代でよかった」

ふふ、と笑う彼女の顔は、もう「隣の奥さん」の顔ではなかった。

女の顔だ。

獲物を前にした、あるいは雄を求める雌の顔だ。

沈黙が落ちた。

今度の沈黙は、気まずいものではない。

互いの呼吸音と、鼓動の音だけが支配する、重く、甘い沈黙。

玲奈の視線が、俊樹の目から唇へ、そしてまた目へとゆっくり移動する。誘われている。

鈍感な俊樹でも、それが分かってしまうほど、彼女の発するフェロモンは濃厚だった。これ以上はいけない。ここから先は、泥沼だ。

一度踏み込めば、もう元の「良き隣人」には戻れない。

だが、目の前の果実はあまりにも芳醇で、熟れきっていて、今にも手折られるのを待っている。俊樹の視線は、吸い寄せられるように彼女の唇に固定された。

薄いピンク色の、濡れた唇。

「……あの、玲奈さん」

掠れた声で名前を呼ぶ。

「……はい」

玲奈は目を逸らさなかった。

それどころか、期待に胸を弾ませるように、じつと俊樹を見つめ返してくる。

彼女の顔が、わずかに傾いた。

拒絶はない。あるのは、静かな受容だけ。

「……いいん、ですか？」

何が、とは聞かなかった。

聞く必要などなかった。

玲奈は長い睫毛を伏せ、無言のまま、ほんの僅かに、けれど確かに顎を引いて頷いた。

ブツン。

俊樹の脳内で、理性の弦が切れる音がした。

俊樹は引き寄せられるように顔を近づけていく。

互いの鼻先が触れ合う。

玲奈が目を閉じ、唇を半開きにして待っている。

熱い吐息が混ざり合う。

もう、止まらない。

【第二章】 夜の帳、理性の決壊（後編）

触れ合った唇は、最初は確認し合うように優しく、震えていた。だが、その静寂は一瞬で破られた。

どちらからともなく、渴ききった砂漠が水を求めるように、互いの唇を貪り始めたのだ。

「……んっ、ちゅ……じゅっ……」

濡れた水音が、静まり返ったりビングに響く。

玲奈の唇は驚くほど柔らかく、そして熱かった。俊樹が舌先で強引にこじ開けると、彼女は拒むどころか、待っていましたとばかりに自らの舌を絡めさせてきた。

ぬちゃ、れろ、じゅるっ。

唾液が混じり合う卑猥な音が、鼓膜を直接震わせる。

コーヒーの苦みなど跡形もなく、口内は雌の甘い蜜の味で満たされていく。

「んんっ、ふぁ、ぁ……んむっ、れろぉ……」

鼻にかかった玲奈の甘い吐息が、俊樹の理性の最後の砦を粉々に粉碎した。

もう、我慢できなかった。

俊樹は彼女の細い肩を抱き寄せると、そのままソファの背もたれに押し倒した。

唇を離し、息継ぎもそこそこに、目の前に晒された白く華奢な首筋へと顔を埋める。

「あっ、佐久間さ……んっ！」

ふわりと香る香水の奥にある、彼女自身のむせ返るような体臭。

俊樹は獣のように、その白い肌に舌を這わせた。

ベロリ。ベロッ、ジュッ。

ただキスをするのではない。味わい尽くすように、下から上へ、耳の裏へとねつとりと舐め上げる。薄い皮膚の下を流れる血管の熱さまで感じるようだ。

「ひゃっ、だめ、そこ……っ！ そんなに舐めないでえ……！」

玲奈が体をくねらせて抵抗するが、それは俊樹の嗜虐心を煽る薪にしかならなかった。もっと味わいたい。この高嶺の花を、自分の唾液で汚したい。

俊樹は吸血鬼のように首筋に吸い付き、強く、音が出るほどに皮膚を吸い上げた。

チュパッ！ ジュルルッ！ ズズッ！

「ああっ！ ああんっ、跡がついちやう……っ！」

言いながらも、玲奈の手は俊樹の背中に回され、ワイシャツを強く握りしめている。

彼女もまた、この乱暴な愛撫に歓喜しているのだ。

俊樹の手は、首筋を愛でながら、ついに禁断の聖域へと伸びた。

ベージュのニットの肩から、その圧倒的な質量を誇る胸を鷲掴みにする。

ムギユウッ。

手のひらが埋もれた。

硬い筋肉など微塵もない。徹底的に柔らかい脂肪の塊が、指の隙間から溢れ出し、形を変える。

大きい。あまりにも大きすぎる。

Gカップという記号では説明がつかない、暴力的なまでの肉の重み。

「んっ！ あ……！」

玲奈がビクリと背中を反らす。

俊樹はニットごと乳首を指先で摘まみ、コリコリと転がした。

「ここ、もうこんなに硬くなってる……」

「い、言わないで……恥ずかしいの……」

俊樹は焦れるようにニットの裾に手をかけ、一気にめくり上げた。

現れたのは、淡いピンク色のレースに包まれた、巨大な二つの果実だった。

深い谷間が、汗ばんで艶かしく光っている。

視覚からの暴力的な刺激に、俊樹の股間は破裂しそうなほどに膨れ上がった。

「失礼します……」

震える手で背中に手を回し、ブラジャーのホックを外す。

バツンッ、と何かが弾けるような音がして、アンダーウェアが緩んだ。

肩紐をずらし、カップを剥ぎ取る。

ボヨンッ、プルンッ。

効果音が聞こえそうなほどの勢いで、二つの巨大な乳房が解き放たれた。

雪崩のように溢れ出した白い肉塊。

先端には、薄い桜色の乳首が、既に熟れきったベリーのように充血し、天を向いて尖っている。

Gカップの、本物の未亡人の乳房。

重力に従ってたわわに実るその様は、芸術品のように美しく、そしてどうしようもなく猥褻だった。

「うわ、すごい……すごいよ、玲奈さん……」

俊樹は我慢できず、右の乳房にむしゃぶりついた。

ハフッ、ジュルッ、チュパアッ！

口いっぱい頬張り、舌で乳首を転がす。

柔らかい肉が顔全体を包み込み、鼻呼吸ができなくなるほどの窒息感。それがたまらなく興奮する。

「ああっ、んんっ！　すごい、音……！　そんなに吸われたら、おかしくなるう……！」

数年間、誰にも触れられてこなかった敏感な身体は、俊樹の舌技に正直に反応していた。

右を吸えば左が揺れ、左を揉めば右が波打つ。

俊樹は胸全体をベロベロに舐め回し、唾液でテラテラに濡らしていった。
チュッチュ、ジュゴッ、ジュボッ。

乳首を強く吸い上げると、玲奈の腰がソファの上で跳ねた。

十分に胸を堪能していると、ふと、俊樹の股間に温かいものが触れた。
玲奈の手だ。

ズボンの上から、既に限界まで硬くなっているモノを、彼女は愛おしそうに撫で始めた。

「……佐久間さん、ここ。もう、こんなになってる」

「うっ、玲奈さん……!」

彼女は体を起こすと、俊樹のベルトに手をかけ、慣れた手つきでバックルを外した。
ジャラッ。

ファスナーを下ろし、ズボンと下着を一気に引き下げる。

ビヨオン、と反り返るようにして、俊樹の昂りがあらわになった。

赤黒く充血し、血管が浮き上がった肉棒。先端からは、既に我慢汁が滲み出て、糸を引いている。

玲奈はその熱い棒をそつと握りしめると、妖艶な流し目で俊樹を見上げた。

その目は、貞淑な未亡人のものではない。

獲物を前に舌なめずりをする、肉食獣の目だった。

「……おつきい。私の口に、入るかしら」

言い終わるが早いのか、彼女はゆっくりと顔を近づけた。

鼻先で亀頭をツンツンと突き、熱い吐息を吹きかける。

そして、赤い舌を長く伸ばし、裏筋を一気に舐め上げた。

——ネロリ。

「あぐっ！」

俊樹の背筋に電流が走る。

だが、それは序章に過ぎなかった。

玲奈は小さく口を開くと、先端をパクリと咥え込んだ。

チュポッ。

温かい口腔内の感触。

彼女は上目遣いで俊樹を見つめながら、ゆっくりと頭を上下させ始めた。

最初は浅く。そして徐々に深く。

ジュボ、ジュボッ、グポ……。

部屋に、卑猥極まりない水音が響き渡る。

未亡人のフェラチオは、恐ろしいほどに巧みだった。

夫を亡くしてから数年、封印されていた性欲が、今は「奉仕」という形で爆発しているようだった。

頬をこけさせ、バキュームのような吸引力で吸い上げてくる。

舌先で裏筋を執拗に攻め、喉奥でカ리를擦り上げる。

「あっ、あぐうっ！ 玲奈さん、すごい、それ、えろいつ……！」

俊樹はソファの背もたれを掴み、快楽に身をよじった。

彼女の唾液と、自分の愛液が混ざり合い、ぬちゃぬちゃと音を立てる。

上品な奥様だった玲奈が、髪を振り乱し、夢中で他人の男の竿を貪っている。その背徳的な光景が、さらに俊樹を

興奮させた。

「んむっ、んっ、ごくっ……！ ジュボッ！ ジュルルルッ！」

激しさは増すばかりだ。

彼女の手も動き出し、竿の根元を激しくしごき上げる。

グチ、グチュ、ネチヨ。

口と手のダブル責め。

俊樹の限界は、あつという間に近づいてきた。

腹の奥から、熱いマグマがせり上がってくる。

「だ、だめっ！ 玲奈さん、出る、出ちゃうっ！ 口に出ちゃうっ！」

俊樹は必死に警告した。

だが、玲奈は止めるどころか、さらに深く、根元まで飲み込むように喉を詰まらせた。彼女の目が、「出して」と訴えている。

いや、「全部飲ませて」とねだっている。

ゴポッ、ズズズッ、ジュボボボッ！！

強烈なバキューム。

その瞬間、俊樹の脳内で何かが弾け飛んだ。

「あ、ああああっ！ 出るッ、イクッ！！」

ドクンッ！

俊樹の腰が大きく跳ねた。

大量の白濁した液体が、玲奈の喉奥に向かって勢いよく発射された。

ドピュッ、ビュッ、ビュルルッ……！！

とてつもない量だ。

数年分の孤独と欲望が詰まった精液が、脈打つたびに溢れ出る。

「んぐっ、んっ、ごくっ……」

玲奈は顔をしかめることもなく、喉を鳴らしてそれを飲み込んでいく。

一度では飲みきれないほどの量を、口の端から溢れさせながらも、決して口を離そうとはしない。

出し切った後も、彼女は残尿の一滴まで搾り取るように、丁寧にカリを吸い続けた。
チュッ、と音を立てて口を離すと、口端から白い糸がタラリと垂れた。

彼女はそれを指で拭い、ペロリと舐めとった。

そして、精液まみれの唇で、慈愛に満ちた、聖母のような、それでいて最高に猥褻な笑顔を向けた。

「……ふふ。凄かったです。佐久間さんの、とっても濃かった」

その一言で、賢者タイムなど吹き飛んだ。

萎えたはずの息子が、再びビクンと脈打ったのだ。

続きは本編でお楽しみください。